受験生と都電～『思い出ガタゴト 東京都電 diary』より～

都電は、明治 44 年 8 月に東京市電として開業してから長年にわたり皆様からご愛顧いただくとともに、移動手段の提供を通じて受験生も応援してきました。

都電 105 周年の記念企画として、都電にまつわる様々なエピソードを公募した上でそのうち 50 話を新聞紙面で発表した『思い出ガタゴト 東京都電 diary』では、昭和 18 年の受験生と都電(当時は市電)のエピソードが綴られています。

「車掌さん、ありがとう。」

市電の思い出は、昭和十八年の二月、私が十八歳の頃です。女学校を卒業する年に、東京の専門学校を受験するため、家のある横浜から電車で東京駅まで行き、八重洲口の前から市電に乗った時のこと。私の家は母子家庭で、何でも一人でやる習慣は身についていたものの、一度も受験校へ行ったことがなかったし、市電に一人で乗るのも初めてだったので、無事受験校に着くか心配で、胸がどきどきしていました。

新橋方面から走ってきた電車の後部にいる車掌さんに「一ツ橋に行きますか？」と聞くと、年配の車掌さんに「行きますよ」と言われて市電に乗りました。

市電はやたらにガタガタと鳴り、つり革が左右に大きく揺れ、心配は増していきました。車窓を見て数分たった頃、車掌さんはわざわざ座っている私の所まで来てくれて「つぎが一ツ橋ですよ」と教えてくれました。「どこか間違ったところに行ってしまうんじゃないか」と不安そうな顔をしていたのが、分かったのかもしれません。

車掌さんはとても優しい人でした。私はほっとしてお礼を言い、学校前で降りることができ、試験を受け、無事合格しました。三年後に教員免許を取得しました。あれから七十二年がたちましたが、黒い革の角のすれたカバンの車掌さんのことはよく覚えています。

車掌さん、私は教員になり、定年まで勤め上げ、九十歳を迎えました。ありがとうございました。

（新聞紙面）

（参考）『思い出ガタゴト 東京都電 diary』(平成 29 年発行)

都電 105 周年の記念企画として、東京都交通局が平成 28 年に都電にまつわる様々なエピソードを公募し、応募総数 500 点の中から 50 話を選出し、特別審査員の思い出や懐かしい都電の写真とともに紹介した一冊です。